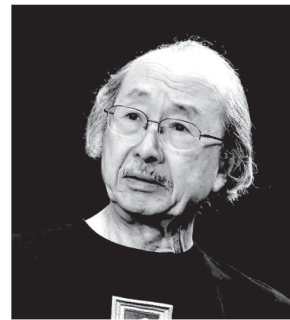


回顧：海を渡って“半世紀前の NY 赴任”⑥



西山 慈恩*

この拙文は最初の掲載が 2022 年 7 月号で、数か月ごとの掲載をこれまで 5 回行ってきた。で、前回の続きの話となれば、今回は子供が生まれてからの一年間が中心になり、1970 年から 1971 年の事で、54 年も前のことになる。半世紀を超えるから表題といくらかの乖離^{かいり}が起こるがその間の変化は今から思えば大きくはないと思われる。ところで、読み返してみると私生活の事ばかりで、赴任した当時の仕事関係のことは全く触れていないので、今回はそれにも触れてみたい。

長男が誕生したのは 1970 年 5 月で、NY では春たけなわであった。新緑の中に各種の花が正に競

演していた。そんな時期であったからだけではなかったと思うが、新生児を外に連れ出せというのが、小児科医の指導であった。それで、今写真をみてみると新生児用の随分立派な乳母車 (Baby Carriage) を買っていて、あちこちに出かけている。(写真が既に変色して鮮やかさが無いが……)

下の左の写真は、住んでいた大団地内のチョットした森のような小公園で、右の写真は Philadelphia 郊外の Longwood Gardens に行ったときのものである。この Garden は NY からは約 130 マイル 約 2 時間半のドライブという遠方であったが、訪れるにその価値のある所であった。



Fresh Meadows



Longwood Gardens

* 丸紅株式会社 (定年退職) J.Nishiyama 連絡先 E-Mail アドレス : jion13381008nishiyama@gmail.com

約 445 ヘクタールもある広大な植物園で、世界最大級の温室、庭園内に点在する美しい噴水、そしてその入場料が無料ということで、アメリカの豊かさを思い知らされたものであった。(ネットで検索してみると、現在は 30 分ごとに入場する Ticket 制で、その料金は大人が \$ 42 となっている)

歴史的には、原住民の部族が暮らしていたところを、1700 年に Quaker が買い取り、植物園に変貌して行ったようだが、維持管理に問題も起こり、20 世紀初めに du Pont 家の所有するものとなり、現在は、非営利団体の運営となっている。広大で美しいだけに、X'mas Season になると、Illumination もあって入場券が早々に sold out となっていることを Net で知った。

最初の掲載で、与信取引の管理専門要員として赴任したと書いた。いわゆる審査部からの派遣であった。当時の商社は、他社の造った物を売するという業態で、会社の審査部は国内取引を中心にそれなりに組織的歴史があったが、海外との取引はいわゆる貿易取引であったから、基本的には L/C (Letter of Credit) を利用することで、支払いの安全を確保するものであった。

しかし、海外取引を拡大する中で、海外に支店や子会社を設立して、そこから直に売ることが拡大していて、それが若くして赴任した理由であった。

米国での通常の取引は、Open Account と言って商品を渡し、一定の支払い猶予期間後に小切手で支払われるというもので、その猶予期間が 10, 30, 60, 90, 120, 180 日間等となっていて、それぞれ Net 10 days, Net 180 days 等と表記される支払い条件が一般的である。買い手側は、その期日に小切手を郵送して支払い、売り手側は、その間、会計上は売掛金として計上し、小切手でのその支払いを待つのである。

日本では、約束手形が使われ、支払い猶予期間は、その約束手形の期日となるが、約束手形の期日不払い、手形交換制度が介在し、銀行取引停止処分となることから、約束手形を振り出した買い手としては不渡りという約束手形の不履行はなんとしても避けようとするから、売り手としては、商品を引き渡してすぐに約束手形を入手すれば、まず安心だが、米国では小切手が送られて来るまでは相手をただ信頼して待つことになる。それで、

売先の信用力を調査することが不可欠となる。

信用力の調査だが、上記のような商慣習だから、売り手としては調査すること、買い手としてはそのための情報提供を行うことが当たり前で、それに基づき、売り手としては信用供与期間とその額の上限 (Credit Limit) を決めていた。従って、取引引きを開始するに際して売り手は買い手に対して、その信用の紹介先の提示を要請し、買い手はその要請に対して、取引銀行や既に取り引きしている他の買い先等を提示してくるのが普通であった。で、売り手は買い手が新規の場合、それらの銀行から預金状況、他の買い先からは、どの様な与信取引を得ているかを聞き出して、自社が供与できる与信限度 (与信条件、与信上限額等) を決めていた。もちろん、買い手の決算資料等の提出も要請するのだが、それは取引引き上の駆け引きもあって難しかった。銀行や他の売り手が出してくれる情報がどこまで正しいかは他の情報等と合わせて検討して総合的に判断することになるのである。

日本では、上記のような調査は、当時は興信所と言っていたと記憶するが信用調査会社 (「帝国データバンク」や「東京商工リサーチ」の前身) が調書を作成して提供してくれていたが、米国では Dun & Bradstreet がそのような調書を提供していたから、まずはこの調書 (Dun Report) を入手して上記の情報と合わせて判断したものだ。

ここで思い出すことは、米国における働きの意識の在り方で、企業帰属意識よりも己の職業意識を大切にすることがある。現在ではかなり薄れてきているようにも思うが労働組合も産業別組織となっていて、(当時の日本では企業帰属意識をベースとした企業内労働組合が主流であったと思う) その流れだと思うが、上記した売り先の信用調査をする担当者 (Credit Manager) が、その企業が売り先に設定する与信限度等の情報を同業の他社の Credit Manager に提供する (もちろんある程度の修正がなされてはいたと思われるが) ことが異常なことでは全く無かったのである。今でもそうかどうか不明だが、場合によっては機密情報の漏洩等^{ろうえい}という問題ということにならなかったのか、不思議な気がするが、別の見方をすれば、すべてを Open にして公平に取り引きしようということであったのかもしれない。

I am the Credit Manger! と名乗って取引先に

乗り込み決算書等の提出を、^{りゅうちょう}流暢でもない英語で交渉したのに応じてくれていたのもそんな背景があったのだろう。

本稿の第1回で、赴任前の準備のために、丸善で「Credit and Collection」という洋書を買ったことに触れたが、Open Accountでの取り引きではCreditの供与の決定が重要であると共にCollectionをいかに行うかが大切で、それがそのような書物の題名にもなっているのである。で、職業としてもその策に精通している者としてのCollection Managerがあり、New York Timesの3行広告のようなところのEmployment欄に「求Collection Manager」のあったのを思い出す。債権の期日回収を図るために、期日を超えても小切手を送付されてこないもの、いわゆるOver Dueとなっているものへの督促はまずは電話で行った。従って、会話術の優れていることが要請されていたから、これは現地人を採用して実行した。もちろん文書での督促のやり方もあり、それは期日のRemindのような穏やかな表現のものから、未払いの状況をCredit Manager業界に拡散するぞというようなもの、更には屈強な取立人を訪問させるというような、下手すれば脅迫ともなりかねないような策も業界誌では紹介されていた。

そのようなことを思い出していると、期日支払いが遅れてきている客先の様子を、Collection Managerから報告された電話の応答の内容、送られてきた小切手の支払銀行に変化が無いか、更には小切手を送付されてきた封書のPosting Dateと電話応答との関係に齟齬が無いか等を、与信限度を設定時の各種資料と共に細かくみて客先の現状を判断した事等が懐かしい。

ところで、上記のようなことは、筆者の居た会社では、もはや歴史的なことのようである。現在では現地での取り引きは現地に現地人の経営する子会社を保有することで行われているようで、日本から赴任したいいわゆる外国人のやることではなくなっているようだ。

秋になった。New England 地方 (Connecticut, Massachusetts, Rhode Island, Vermont, New Hampshire, Maine の6州) の紅葉を、観に出かけた。ヒッチコックが監督し、シャーリー・マックレーンの映画デビュー作となった「ハリーの災難」を高校生の時に観ていて、映画がそこで撮られた

という Vermont 州の紅葉の美しさに圧倒されていた記憶があったから、実際に観てみようということであった。行程を計画した道路 Map には道中に Motel はいくらでもあったから、敵当なところで決めればよかろうと、宿の予約をしないままに出かけたのが間違いであった。夕刻になりそろそろ決めるかと思って Motel に近づくと、No Vacancy の表示が出ていた。じゃあ次の所でと車を走らせたがそこでも No Vacancy、次は次はと期待したが Vacancy の表示のあるものが無かった。夕焼けが落ち、暗くなってきた頃、後部座席に設置していた Baby Carriage の中の誕生後 4 か月の息子が泣き出し、助手席の家内が私の手配のまずさを責めはじめた。それに抗することも出来ず、Vermont 州の首都のある Montpelier 辺りに居たから、NY まで帰ることが出来る距離でもなく、暗い中をひたすら走ったが Vacancy を表示する Motel は見つからず、意を決して No Vacancy と表示があったものの、やや大規模であった Motel の Reception で、窮状を訴えた。“この季節に予約も無く来訪するのは無茶だよ”と言うものの、赤子連れの若い外国人夫妻に同情してくれたのだろう、あちこちに数回電話した後、いわゆる民宿が見つかったからと住所と簡単な地図を描いたものを手渡してくれた。Thank you very much! だけでは、感謝の気持ちが伝わらない気がした。急いで付け加えた。I deeply appreciate your kindness!! 相手はにこやかに答えた。You're welcome!

教えられた民宿を訪ねると、老夫妻が出てきた。2 階の部屋に案内され安堵したとき、老妻が言った。「主人の体調が今日はよろしくないの、静かにしてほしい。申し訳ないが、今夜これからの Bath Tub の利用は控えて欲しい」そんなことは問題でなかった。とにかく一夜をベッドで過ごせることに安堵した。安堵したところで、気付いたのは夕食を取ってないことだった。Vacancy の表示のある Motel を見付けることで、それどころではなかったのである。子供には離乳食を帯同していたから問題はなかったが、親どもには紅葉見物の途中で購入していたリンゴがあるだけだった。子供がどう感じていたかは、分からないが離乳食を食したあと泣くことも無く寝入ってくれたので、家内とリンゴを丸かじりして夕食とした。体調を壊してリンゴだけを食して寝ていたことはこれまでもあったが、元気な体でリンゴだけの夕食とい

うのは初めてのことであった。丸かじりしたリングは日本でのものと違って、小ぶりで硬かった。

下の写真は、翌朝その民宿を発つときのものである。前回記した Tanglewood での民宿でもそうであったが、老夫妻から「留学生かね？」と聞かれた。E1 VISA で入国している Business man だとこちらが思っている、彼らには東洋の貧しい国から豊かな国に学びに来た留学生にしか見えなかったのだろう。その下の写真は、色あせているが、Vermont の州議会議事堂である。



民宿の夫妻と

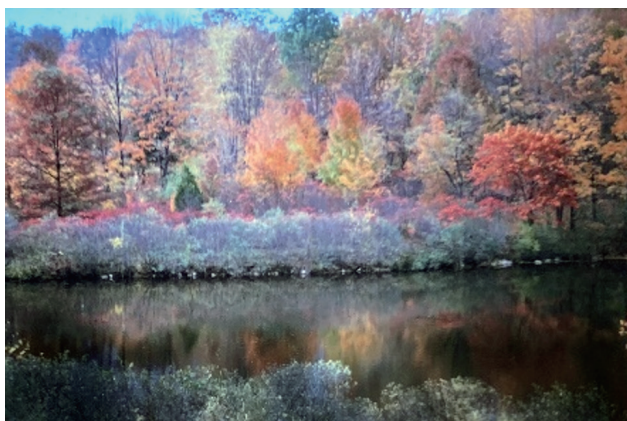


Vermont 州議会議事堂

これを書いていて懐かしくなり、DVD を借りて「ハリーの災難」を改めて観てみて驚いた。1955 年制作の映画であったから、当時の撮影技術は現在のものとは格段の差があり、記憶にある「圧倒的な美しさ」が無く、映画の話自体も、コメディ調のドタバタでキレが感じられるものでなく拍子抜けであった。

当時の米国は、世界のリーダーとして自他ともに認めていて、その自信が人々の間でも浸透し

ていて他民族の存在をおおらかに認めていたようで、それは上記した民宿での対応にも感じられていたが、それは団地内での日常の触れあいにもあったと思う。黒い髪の Baby は珍しかったのだろう、公園では子供たちが寄ってきたものだ。



Vermont の紅葉



団地内での語らい

NY 観光の目玉の一つにブロードウェイでのミュージカル観劇が挙げられるが、いわゆる Performing Arts ということでは、触れないわけには行かない所がある。

Manhattan の中央部にドンと位置する Central Park の西側を南北に走る大通り 8th Avenue を越え、次の大通りである 9th Avenue と 10th Avenue の間、南北では 62nd St. から 65th St. に及ぶ敷地に、1950 年代から 1960 年代にかけて開発された総合芸術施設のリンカーンセンター (Lincoln Center for the Performing Arts) である。

この場所はかつては中南米等からの移民を中心に低所得者が住んでいたところを、ジョン・D. ロックフェラー 3 世のイニシアティブで開発されたもので、Metropolitan Opera House を正面にみる

とその前に大理石で造られた噴水、左に New York State Theater 右に Philharmonic Hall を配し、それぞれが Metropolitan Opera, New York City Ballet, New York Philharmonic, の本拠地となっていて、周りにジュリアード音楽院、室内楽用の Alice Tully Hall, 演劇用の Vivian Beaumont Theater 等もある。日本との関係で言えば、ピアニストの中村紘子、ヴァイオリニストの五嶋みどり、諏訪内晶子がジュリアードで学んでいて、最近では広津留すみれがハーバード大を出た後ここで学んでいる。演劇では 2015 年に渡辺謙が「王様と私」で主演舞台を踏んだのが Vivian Beaumont Theater であった。

なお、客席数 3,800 を有する Metropolitan Opera House のロビーには Marc Chagall の The Source of Music, The Triumph of Music と題されている二つの大きなタペストリーが飾られていて、音楽の殿堂であることを嫌でも知らされる。

時間が前に戻るが、家内が来て間もなくだったと記憶するが、NY State Theater で上演されていた West Side Story を観にここに来た。このミュージカルは 1957 年にブロードウェイで初演されていて、その時は大して評判にはならなかったものの、1961 年に Natalie Wood と George Chakiris を主演に映画化されたものが大評判を得ていたことから舞台の再演となっていたものであった。「ロメオとジュリエット」の物語を NY の現在版として、低所得者層の若者の抗争（欧州系とプエルトリコ系の間での）として展開しているが、そのような若者が居た所を、立ち退かせてリンカーンセンターセンターが開発されたという歴史があり、そんなミュージカルを皮肉なことに立派に開発された施設でみたのである。



Lincoln Center